

真理は酒より強いのか

水田英実

1. 「真理は酒より強いのか」というテーマを取り上げようとする、のっけから難問に直面することになる。そもそも「真理」と「酒」が比較にならないことは分かり切っているのに、そんな比較にならないものを比較することにどんな意味があるのか、という問題が生じて、それ以上先に進むことができなくなるからである。

もっとも、昔から、比較にならないものを比較することをたとえて諺に、「月と鼈(すっぽん)」とか「釣鐘に提灯」とか言う。「駿河の富士と一里塚」というのもある。しかし、「月とすっぽん」なら、両方とも丸いとか、「釣鐘に提灯」なら、どちらもぶら下がっているとか、富士山と一里塚もどこか形が似ているとか、もちろん言わんとするところは全然違うということであるにしても、どこかちょっと似ているところがあると言えなくもないものを二つ並べているようにも見える。

もしかすると、真理と酒の比較をする場合にも、何か似ていると言えるようなところを見つけることができるかもしれない。とはいえ、こじつけで共通点を見つけても、それだけでは説得力のある解決策を得たことにはならない。

さて、じつは、ヨーロッパ中世(13世紀)のパリ大学・神学部で行われた公開討論のときに、何と「真理は酒よりも、国王よりも、女性よりも強いのか(Utrum veritas sit fortior inter vinum et regem et mulierem.)」というテーマが取り上げられたことがある。むろん、そうは言っても、こともあろうにパリ大学の神学部で、どうしてこんなテーマを選んで公開討論をしたのかとか、まともに議論をしたのかとか、新たな疑問が百出する。

ともあれ、そのときの討論の内容を記した資料が残されている。まずそれを調べてみよう。まともな討論が行われていたとすれば、先ほど来の難問を解決する糸口の発見が期待できる。

2. 『任意討論集』(S. Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Quaestiones Quodlibetales cura et studio P. Fr. Raymundi Spiazzi, O.P., Marietti, 1956.)と題するラテン語のテキストがある。スコラ哲学の大御所としてよく知られているトマス・アクィナス(Thomas Aquinas, 1224/5~1274)が、1270年のクリスマスにパリ大学の神学部で行った公開討論の記録である。本題に入る前に、やや遠回りをすることになるけれども、当時のヨーロッパの大学の様子を、思想状況と合わせて、多少詳しく考察しておきたい。

ヨーロッパ中世の大学では「討論」が特別に重要な意味を持っていた。いま日本の大学でも、講義をすることに加えて、ゼミを主宰することが、教授の主要な任務である。

中世のヨーロッパでも同様であった。というより、こういうスタイルの大学の原型が中世のヨーロッパにあると考えられるのである。

国語辞典を引いてみると、「ゼミ(ゼミナール)」とは「大学の教育方法の一つ。教員の指導の下に少数の学生が集まって、特定の分野・テーマについて文献講読や発表・討論などを行うもの」(『広辞苑』)、また、こういう方法を用いて「その学問の研究法を体得させる訓練」として、「演習」と呼ばれる」(『新明解国語辞典』)というふうに、(ごく簡単に)説明している。

しかしゼミの現場では、言葉の説明以上に相当な緊張が伴うものである。テキストを注意深く

読んで、正確に理解するだけでも、大変なことであるけれども、さらにそこから出てきた問題について討論を重ねて、結局のところ何がどうなのか、何がどうでないのかを明らかにするという、どこまでも緊張が続くプロセスに進むことが求められるからである。

ところで古代の日本に、官吏養成を目的とした高等教育機関としての大学(大学寮)があったことは、周知の通りである。奈良時代に、律令制の申し子のような吉備真備(695-775)が学んだり、教えたりしたところである。もっとも大学寮での学習法は、『論語』や『孝経』などの白読(漢文を中国音で読み進む、素読)に習熟して、注も合わせて暗誦できるまでになってから、講義を聴くというものであったと言う。(cf. 桃裕行『上代学制の研究』。「講義がどのようなものであったかは、つまびらかにし得ない」とも補足している。)いずれにしても、かなり受身的に見える。その点で、次々と新しい思想を生み出してきた、中世のヨーロッパから始まる大学とは様子がだいぶ違う。

ヨーロッパの古い大学と言え、12世紀後半にできたとされるパリ大学やオックスフォード大学である。(ボロニア大学が最古で11世紀の終わりにできたとする。)その後、近代国家の発展とともに欧米の各地に大学ができていく。それにならって日本に大学が設立されたのは、明治以後(cf. 明治19年(1886)に帝国大学令)である。

起源となる中世ヨーロッパの大学が討論の場を持ったことの意味について、ジャック・ルゴフが『中世の知識人』(Jacques Le Goff, *Les intellectuels au moyen âge*, Paris 1957; 柏木・三上訳、岩波新書1977)の中で次のように書いている。

演習の基礎となったテキストの註釈(講読(レクティオ))は、字義(リテラ)を確定する文法の分析に始まり、ついで意味(センス)を理解させる論理的説明に進み、論説と思想の深い意味内容(センテティア)をあきらかにする解釈で完成する綿密な分析である。

ところが註釈には討論がつきものであった。弁証論は、テキストが提起する問題を論ずるために、テキストのたんなる理解以上のことを可能ならしめ、その結果、真理の探究こそ肝要で、テキストの理解は二義的なものとなった。すなわち論証が註釈にとってかわったのである。適切な手順に則り、講読は討議の段階に進む。大学の知識人は、もはや支えにしかすぎないテキストを討議に付したとき、すなわち受動的姿勢を能動的姿勢に改めたとき、名実ともに誕生したといえよう。教授はもはやたんなる註釈者ではなく、思想家であった。彼らは問題を解決し、新たな思想を生み出した。討論の結論である討論裁定は、彼らの思惟の産物である。

十三世紀における討議は、テキストそのものから完全に離れ、一人立ちする。教師と学生の積極的な参加をまって、それは議論の対象となり、討論(ディスプタティオ)となった。(柏木・三上訳 pp.121-122)

3. 一定のテーマを取り上げて討論をする場の提供という中世以来の大学の役割は、いまや大学の枠を超えた学会によって補完される時代になっている。各大学の研究者たちを中心にして開催される学会で、ゼミにもまして緻密な発表や議論が行われるようになったからである。

ところでトマス・アクィナスが、アルベルトゥス・マグヌス(Albertus Magnus, c.1200~1280)の推挙を受けて、パリ大学教授に就任したのは1256年である。1259年に一旦辞めてイタリアに戻り、オルヴィエトやローマなど、各地で教授活動を続けた後、1268年頃に再度パリ大学教授に就任している。この異例の人事の背景には、12世紀から13世紀にかけて、アリストテレス全集のラテン語訳が行われ、西欧世界にアリストテレス哲学の全貌が知られる(アリストテレス(Aristoteles, 384~322B.C.)は、その論理学書をボエティウス(Boetius, c.480~524/5)がラテン語に翻訳したので、早くからいわば論理学者として知られていた。しかしこの時期になって初めて、

その思想が論理学を越えた分野に及ぶことが明らかになる)に及んで、キリスト教信仰に依拠しない合理的な神存在論証が行われているに加えて、さらに知性単一説や世界の永遠性を主張していると考えられたことから、キリスト教との整合性を巡って混乱が生じ、思想的危機に見舞われたことがある。

当時の神学部教授の主要な職務には、聖書の注解を内容とする講義を行い、討論を主宰するほか、説教をすることも含まれていた。加えてトマス・アクィナスは、ラテン語に翻訳されたばかりのアリストテレスの著作の注解もしている。

16世紀以降、これらの注解や討論の記録(写本)を活字化したトマス全集がいくつか刊行されている(ピアナ版(1570-1571)、パルマ版(1852-1873; repr.1948-1950)、ヴィヴェ版(1871-1880)、レオニナ版(1882ss. 校訂版、現在も刊行中。マリエッチ版はこれの廉価版))。トマス全集には、『真理論』 *Quaestiones disputatae de veritate*(パリ、1256-1259)や『能力論』 *Quaestiones disputatae de potentia* (ローマ、1265-1266)、『靈魂論』 *Quaestiones disputatae de anima*(パリ、1269)などが『定期討論集』(*Quaestiones disputatae*)として収録されている(これらの定期討論が行われた時期と場所には諸説があって詳細は不明)。

定期討論は正規の授業の一環であった。ゼミの学生たちは、教授が提示した問題に対して、賛成と反対に分かれた上で、それぞれ三段論法で自説を主張する。こうした異論(アルグメントゥム)が二十も三十も提出された後で、教授が独自の観点から議論を総括し、裁定を行う(主文解答)。その後さらに学生たちの異論に対して、不備な点を指摘するなどして丁寧に答えていく(異論解答)。

ルゴフは『中世の知識人』の中(前掲箇所)で、13世紀のパリ大学で行われた討論の様子を、中世哲学史の研究者(マンドネ)が次のように記述しているのを引用している。

教授が討論を行うとき、神学部の他の教授と講師(バカラリウス)による午前中の講義はすべて中止され、討論を行う教授のみが出席者によくわかるような簡潔な講義をする。やがて討論が開始され、多かれ少なかれ午前中のかなりの時間を費やした。神学部のすべての講師、討論を行う教授のもとで学ぶ学生は、その演習に参加せねばならなかったが、他の教授と学生の参加は自由であったと思われる。が教授の名声と、扱われる論題によって、そこにつどう参加者に増減があったことはまちがいない。パリの聖職者も、この街を通りかかった高位聖職者や他の教会の要職にある者も、心を高ぶらせるこの討論に進んで出席した。討論はいわば学者のトーナメント競技であった。

討論に付すべき問題は、討論を行うことになっている教授によってあらかじめ決められ、討論予定日とともに神学部の他の研究グループに公表される。…… (P. Mandonnet, *Revue Thomiste*, 1928.)

いっぽう任意討論は、正規の授業とは別に、クリスマス(降誕祭)とイースター(復活祭)の時期に、一般の参加を得て行われた。論題もその場で募ったけれども、賛否に分かれて討論をするという形式は共通であった。『任意討論集』はそのような公開討論会の記録である。人気のある教授が主宰する討論には参加者が殺到したようである。

ルゴフは前掲書で、この任意討論(前掲訳では「自由討論(クオドリベタ)」)について、「年に二回、教授は、「誰によって提出されようが、いかなる主題についてであろうが一切かまわずに」問題を論ずることを申し出られる会を催すことができた」と書き、別の研究者(グロリュ)の著書から、次のように引用している。

通常の討論の場合、教授は自分が扱う主題をあらかじめ公表し、それについて熟考し、準備することができた。ところが自由討論では、誰がどのような問題を提起してもよかった。それは受ける側の教授にとって、実に気がかりなことである。敵意にみち、奇妙で意地の悪い、およそ重要でない質疑あるいは異論が、いたるところからもちかけられることもありえたからである。なるほど彼の意見をうかがうために、誠意ある問を発する者もいたかもしれない。が彼を自己矛盾に陥らせたり、あるいは彼みずから進んで扱おうとはしなかった陰呑な主題について、述べさせようとする者もいたであろう。彼を窮地に陥れようとしたのは、あるときは物見高い門外漢、じっとしてはいられない気質の持主であり、またあるときは嫉妬深い論敵、せんさく好きの教授であった。ときおり提題はわかりやすく興味を惹くこともあったが、ときに質疑は不明瞭で、教授がその正確な内容や真の意味を把握するのは容易でなかったであろう。ある者がはっきりと学問的な領域にかぎって率直に質問するかと思えば、他の者はことさらに政治的下心あるいは中傷心をいだいていた。……したがって自由討論を行おうとする者には、並外れた機敏さ、ほとんど万能に近い能力が必要とされたのである。(P.Glorieux, *La littérature quodlibétique*, 1936)

トマス・アクィナスの『任意討論集』は、1256年のクリスマス以降、1272年のイースターまで、2回の在職期間中にパリ大学で行った任意討論を収録している。しかし年代順ではなく、1270年のクリスマスのはものは12番目になっている。次の表はワイスハイプルによる。

第一パリ時代	1256	クリスマス	任意討論 7
	1257	イースター	(散逸)
	1257	クリスマス	任意討論 8
	1258	イースター	任意討論 9
	1258	クリスマス	任意討論 10
	1259	イースター	任意討論 11
第二パリ時代	1269	イースター	任意討論 1
	1269	クリスマス	任意討論 2
	1270	イースター	任意討論 3
	1270	クリスマス	任意討論 12
	1271	イースター	任意討論 4
	1271	クリスマス	任意討論 5
	1272	イースター	任意討論 6

cf. J.A.Weisheipl, Jean-Pierre Torrell, O.P. *Initiation à saint Thomas d'Aquin: sa personne et son œuvre*, (Fribourg, 1993); 拙稿「トマス・アクィナス 生涯と著作」『哲学の歴史3』(中央公論社2008)所収、ほか。

4. さて、だいぶ遠回りをしたけれども、本題に入る。問題の討論は、前述の通りトマス・アクィナスが、1270年のクリスマスにパリ大学の神学部で行った公開の任意討論である。どのように行われたのであろうか。『任意討論集』の第12集に、第14問第1項として記録されているのは、真理の強さを論じようとする問題である。

具体的には「真理は酒・国王・女性よりも強い(Utrum veritas sit fortior inter vinum et regem et mulierem.)」と問うている。この問題を提起したひとは、真面目に議論をしたかったのか、トマス教授を困らせたいと企んでいたのか、問題を見ただけではよく分からない。いずれ

にせよ返答に窮する問題である。

異論(否定的見解)は三つ取り上げられている。ただ、次の通り、どれも十分に展開されているとは言えない。たしかにそれぞれ理由をあげて、酒が強い、国王が強い、女性が強いと主張しているけれども、真理の強さとの比較をしていないからである。

- (1)酒が強いと思う。何故なら酒は人をすっかり変えてしまうから。
- (2)いや国王が強い。何故なら国王は死の危険に身を晒す戦地にさえ人を送り込むから。
- (3)いや女性である。何故なら女性はその国王たちをも支配するから。

もしかすると(異論 1)ひとはみな、もって生まれた理性で、ことがらの真偽を判断できるけれども、酒を飲むと、そのひとの判断はしばしば狂う。だから酒は真理を変えてしまうほど強い、というふうに考えているのかも知れない。そこからさらに(異論 2)酒によってひとが変わることはあっても、ひととして生きている限り、自分のしたことに責任を負わなければならない点は変わらない。ところが、ひとが死ぬということになれば、事態はまったく変わる。そうすると、兵士を戦地に行かせる国王のほうが酒よりはるかに強いということになりそうである。国王は人の生命を預かる力をもつと考えられるから。しかし(異論 3)そういう国王より強いのが、国王を支配して思い通りに操る女性にほかならない・・・という議論なのかも知れない。

ちなみにこういう議論の出発点に、デカルト(Descartes, 1596-1650)が『方法序説』(Discours de la méthode, 1637) 第一部の、よく知られた書き出しに示したような人間理解が前提されているのかも知れない。デカルトはこう書いている。

良識はこの世で最も公平に配分されているものである。というのは、だれもかれもそれを十分に与えられているとあって、他のすべてのことでは満足させることのはなはだ難しい人々でさえも、良識については、自分がもっている以上を望まぬのがつねだからである。(デカルト『方法序説』 野田又夫訳(世界の名著 22 所収)、中央公論社、1967)

誰しも自分の判断は正しいと考えて譲らないどころか押し付けさえするというのは、良識(bon sens)に関するデカルト一流の皮肉である。ただし、デカルトはここからさらに次のように述べて、理性を使う「方法」に注意が必要だという議論を展開させていく。

むしろそれは次のことを証拠だてているのである。すなわち、よく判断し、真なるものを偽なるものからわかるところの能力、これが本来良識または理性と名づけられるものだが、これはすべての人においてうまれつき相等しいこと。したがって、われわれの意見がまちまちであるのは、われわれのうちのある者が他の者よりもより多く理性をもつから起こるのではなく、ただわれわれが自分の考えをいろいろちがった途(みち)によって導き、また考えていることが同一のことでない、ということから起こるのであること。というのは、よい精神をもつというだけでは十分ではないのであって、たいせつなことは精神をよく用いることだからである。(前掲書)

5. さて問題の任意討論では、真理ではなく酒・国王・女性が強いと主張する三つの異論を取り上げたあと、これらに反対して、

(4)〔旧約聖書の〕『第三エズラ記』4章35節に「真理のほうがもっと強い」と記されている。

と主張する異論(反対異論)を取り上げている。典拠として『第三エズラ記』の一節が挙げられている。そこに記されているのは、ダレイオス王の護衛をつとめる三人の若者が「この世で一番強いものは何か」という問題をめぐって知恵比べをする物語(3-4章)である。「真理は何ものよりも強い」と答えた若者が勝つ。

『第三エズラ記』は、正典の『エズラ記』と違って、ヘブライ語聖書の正典から外れている。ただ七十人訳と呼ばれるギリシア語訳聖書には含まれているので、外典(アポクリファ)として扱われる。現行のラテン語訳聖書(ヴルガタ訳)(Biblia Sacra iuxta Vulgatam versionem, Stuttgart 1969, 3 Aufl. 1983)も、これを巻末に収録している。

〔補足〕ヴルガタ訳の『第三エズラ記』は、七十人訳の『第一エズラ記』にあたる。日本語訳聖書(新共同訳)では旧約聖書続編に収録している。cf. 村岡崇光訳『第一エズラ書』『聖書外典偽典第一巻 旧約外典 I』(教文館 1975)所収。なお七十人訳の『第二エズラ記』は、正典の『エズラ記』と『ネヘミア記』にあたる。ヴルガタ訳はこの二つを『第一エズラ記』、『第二エズラ記(ネヘミア記)』と呼んでいる。「ダレイオス王」は、ギリシアとの間でいわゆるペルシア戦争(500-479B.C)を始めたダレイオス大王(Darius1世、在位 522-486B.C)。この王の時代にエルサレムの神殿(B.C.10c.-c.586B.C. ソロモンの神殿。バビロニアによって破壊された。)が再建された。第二神殿(c.516B.C.-70A.D. ゼルバベルの神殿とも言う。B.C.1c にヘロデ大王によって修理・拡張されたあと、ローマ帝国によって破壊されて現在に至る。いま残る「嘆きの壁」はこの神殿の一部)。ユダヤ人をバビロン捕囚から解放したことで知られるのは、キュロス2世(在位 559-550B.C.)。

『第三エズラ記』の3章と4章を読んで見ると、上述の三つ(反対異論を含めると四つ)の異論の主張は、ちょうどこの若者たちが言うことに対応していることが分かる。だから、この討論の出題者には聖書解釈をさせようという意図があったのかも知れない。知恵比べの物語は次のようなものである。(ヴルガタ訳、新共同訳、村岡訳を参照)

〔盛大な宴の後、〕ダレイオス王は寝室に退いて深い眠りに就いた。その間、王の身辺警護に当たっていた三人の若者は互いに言い合った。「この世の中で一番強いと思うものは何かを一人ずつ言いあてることにしようではないか。いちばん賢明な解答をした者に、ダレイオス王は、豪華な褒美をくださるにちがいない。〔中略〕そこで彼らは各自解答をしたためて封をし、ダレイオス王の枕の下に置いた。〔中略〕一人は、一番強いものは酒、と書いた。もう一人は、一番強いものは王、と書いた。三人目は、一番強いものは女性たちだが、真理はすべてにまさる、と書いた。王が目覚めたとき、〔おつきの者が〕書きつけをとって渡し、王は読んだ。〔中略〕王は言った。「若者たちを呼んで、書いたことを本人たちに説明させよ。」(3.1-3.15)

酒の力をあげた最初の者が、集められた人たちの前で口をきって、こう答えている。

みなさん、酒こそ一番強いものなのではないでしょうか。酒はそれを飲む者すべての精神を攪乱させます。王であろうと孤児であろうと、奴隷であろうと自由人であろうと、はたまた貧乏人であろうと金持ちであろうと、その精神においてえらぶところはなくなります。人を陽気にし、快楽を追い求めさせ、悲しみも負債もいっさい忘れさせます。誰もが大きな気持ちになって、相手が国王であろうが諸侯であろうが構わず、話のいきつく先はきまって金ということになります。また酒を飲むと、友人兄弟に対する情を忘れ去って、とつぜん剣(つるぎ)を抜くことさ

えあります。酔いがさめれば、酒のうえでの失態は何も覚えていないのです。みなさん、酒はこういう行動を人に強いるのですから、一番強いものなのではないでしょうか。こう語ると、彼は口をつぐんだ。(3.18-3.24)

次に、王の力と書いた二番目の者が語り始める。

みなさん、大地と海、そしてその中の一切を支配する人間こそ一番強いのではないのでしょうか。しかし王にはもっと力があります。王はその人間たちの上に立つ統治者だからです。王が彼らに命じたことは、それが何であれ、彼らは実行します。王が彼らに互いに戦えと言えれば戦い、敵地に派遣すれば、出かけて行って山でも城壁でも見張塔でも征服します。彼らは、殺すにせよ殺されるにせよ、王の命に背くことはありません。勝利を収めれば、彼らは略奪したものをすべて王のもとに持ち帰ります。兵役を免れて戦争に行かない者たちは、土地を耕します。そして種をまき、収穫したものを王のもとに届け、納めます。(中略)民も兵士たちもみな、王に聞き従うのです。王は横になって食事をとり、酒を飲み、眠ります。その間、人々は王の身边を警護します。誰一人として持ち場を離れることは許されず、王への服従のみが求められるのです。みなさん、これほどの服従を要求できるからには、王こそもっとも力のある者なのではないでしょうか。こう言って、彼は口をつぐんだ。(4.2-4.12)

第三に、女性たちと真理をあげた、ゼルバベルという名の若者が語る。

たしかに王は偉大であり、人間も数が多く、酒の力も強いでしょう。ですが、詰まるところこれらのものを支配している者は誰かと言えば、それは女性ではないでしょうか。女性が王とすべての民を生み、女性から生まれたこの人たちが海と大地を支配しているのです。ぶどう園の開拓者たちを養い育てたのも女性です。そのぶどう園のお蔭でぶどう酒ができるのです。女たちが男たちの衣裳をこしらえるのです。女たちが男たちのために栄光を添えるのです。女性あつての男性なのです。(男は)たとえ金銀その他ありとあらゆる美しいものをかき集めたとしても、容姿端麗な一人の女性を見れば、それらすべてを放棄し、口を開けて彼女に見とれる始末です。(男は)誰でも、金銀その他ありとあらゆる美しいものよりも彼女のほうを選ぶものです。(中略)ですからみなさん、こういうことができる以上、女性こそもっとも力のある者ではありませんか。(4.14-4.32)

これを聞いた「王と高官たちは互いに顔を見合わせた。すると若者は、今度は、真理について語り始めた。」(4.33)

みなさん、たしかに女性は強い。しかし大地は広大で、天は高く、太陽はその運行が速いので、天の軌道を回って、一日で元の場所に戻ってきます。これらのものを作り出した者こそ真に偉大ではありませんか。真理こそ偉大であり、すべてにまさる力のある者なのです。全地は真理に呼びかけ、天は真理を賛美し、すべての被造物は震えおののきます。真理と共にあれば、偽りが全くないのです。酒は偽りです、王も偽りです。女たちも偽りです。(補足:およそ真理は虚偽を含むことがないのに対して、酒にしても王にしても女たちにしても、不純な要素をうちに含んだ、移ろいゆく性のものでしかないと言うことができる。)人の子たちはすべて偽り、また彼らのすることもすべて偽り、その他すべてこの種のものは偽りです。こういったものの中に真理はありません。これらはみずからの偽りのうちに滅んでいくのです。しかし、真理は滅びるこ

とがなく、その力は永久に続き、永遠に生きながらえて支配し続けます。（中略）真理の神はほめたたえられますように。（4.34-4.40）

すると話を聞いていた一同が声を発し、「真理は偉大で、何者にもまして強い」（4.41）と言った。そこで、ゼルバベルが勝者として王から褒美を貰うことになり、エルサレムとその神殿の再建の許しを願い出て聞き入れられたというところで、知恵比べの物語は終わる。

6. さてトマス教授は、討論の場で行われた議論に対して、どのような裁定をしたのであろうか。

『任意討論集』の該当箇所に記載された主文解答を見ると、トマス・アクィナスは最初に「この問題は、『エズラ記』の中で若者たちによって提起されたものだ」と指摘している。

しかし先の引用から明らかなように、『第三エズラ記』にある知恵比べの物語は、「真理の神」を持ち出したところで終わっている。これはかなり特殊な意味での「真理」であるから、このままでは『聖書』の章句から離れた議論になるかどうか更なる吟味を要する。

これに対してトマス・アクィナスは、この知恵比べの物語から離れたところに議論の出発点を置いている。すなわち「酒と国王と女性と真理という四つは、それ自体としてみれば、同一の部類に属していないから、比較のしようがない」ということを確認するところから議論を始めているのである。

「同一の部類に属していない」という理由を上げた上で、酒と国王と女性と真理の中でどれが強いかと聞かれて、返答に窮するのは無理もないということをも説明しているのである。たとえば、色という同じ種類のもの同士であれば、波長を比べるとかというような、比較の仕様があるのに対して、もともと比較の仕様がものを比較するのは無理な相談だと言うのである。その上で、トマス・アクィナスは議論をどのように展開させたか。こう論じている。

しかし、〔それ自身として比較の仕様がものであっても〕何らかの結果との関係によって考察するならば、一致するところが出てきて、比較ができるようになる。これらのもの

〔酒・国王・女性・真理〕の場合、一致して比較が可能になる結果とは、人間の心の変化である。だから、これらのものの中で、何が人間の心を大きく変化させるかということを探ればよい。

本来は比較の仕様のないものであっても、何らかの共通点を見出すことができれば、比較が可能になるという方策を打ち出しているのである。いまの場合は、人間の心にどれだけ大きな変化をもたらすかという結果を比較するという観点を打ち立てることができるというのである。そこから次のように議論を展開させていく。

人間〔の心〕を動かすものの中で、あるものは身体にかかわるものであり、あるものは魂にかかわる。魂にかかわるものには二つのものがある。感覚〔的認識〕にかかわるものと知性〔的認識〕にかかわるものである。知性〔的認識〕にかかわるものには、実践にかかわるものと思弁にかかわるものがある。

要するに(1)身体の状態を変化させることを通して心を変化させるもの、(2)特に感覚に働きかけることを通して心を変化させるもの、(3)実践の領域で心を変化させるもの、(4)思弁の領域で心を変化させるものという四種類が考えられるというのである。そして四つの領域のそれぞれにおいて、最も強力なのは、(1)酒、(2)女性、(3)国王、(4)真理だと答えている。テキストを追って読むと、次の通りである。

(1)身体の状態に関して、本来のあり方を変化させるものの中で最たるものは、酔いによって能弁にさせる酒である。

酒の強さについて、トマスはこのように分析している。ここでいう酒とは、言うまでもなく、葡萄からできた酒つまりワインのことである。ちなみに、『神学大全』に「葡萄の果汁に変化した水はワインである。(Aqua conversa in liquor uvae est vinum.)」(Thomas Aq., Summa theologiae, III q.66, a.4c.)と述べて、水とワインの種的な相違に言及しているところがある。ただし「発酵」への言及はない。なおカナの婚礼の際に、水瓶を満たした水が葡萄酒に変化したという奇跡を記しているのは、『ヨハネ福音書』第2章である。

酒もワインも飲めば酔う。しかし、酩酊するような飲み方ではなく、飲むと無口なひとがお喋りになるところに着目するのは、文化の違いであろうか。

(補足) キリシタン時代に日本に来た宣教師がこんなことを書き残している。ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』(Luis Frois (1532-97), Tratado em que se contem muito susintae abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão, 1585)岡田章雄訳(岩波文庫)第6章38:われわれの間では酒を飲んで前後不覚になることは大きな恥辱であり、不名誉である。日本ではそれを誇りとして語り、「殿はいかがなされた。」と尋ねると、「酔払ったのだ。」と答える。

テキストに戻る。

(2)感覚的欲求を変えさせるものの中で他にまさるのは、官能的な悦楽である。なかでも性的に魅了するもの、つまり女性が強い。

(3)実践の領域において、人間のすることに対して、最大の支配権を有するのは国王である。

(4)思弁の領域において、最高位にあって最も強いのは真理である。

こう答えた上で、最後に、これらの領域の間に序列があるから、それに従えば、「身体は感覚に従属している、感覚は知性に従属している、知性の中でも実践的知性は思弁的知性に従属している、だから、端的に言えば、最も高貴で、すべてに優越した最強のものは、真理である」と結論づけるにいたる。—これが、1270年のクリスマス(正確にはその前の週)にパリ大学神学部で行われたぶっつけ本番の公開討論の席上、「真理は、酒よりも国王よりも女性よりも強いのか」という問題に対して、トマス教授が即興で出した解答である。

女性の魅力には、強大な支配権を持つ国王もかなわないというような、知恵比べの若者が持ち出した論法は、それぞれの力の及ぶ領域を明確に区別する観点から、斥けられている。異論の主張が斥けられなければならなかったのは、主文解答において導入されている「観点」の故であることが分かる。それぞれの力の及ぶ領域を明確に区別したとき、四つの領域の間に序列があることが含意されていた。そこで、真理が一番強いという最終的な結論が導かれることになったのである。

このようにして、まさに鍛え上げられた討論の「方法」を適用することによって、非常にすっきりとした結論が出てきたけれども、果たして参加者たちはどのような印象をもったであろうか。与えられた問題に対するトマス教授の洞察力、討論術には感服しながらも、どこかでまだ、「いや酒のほうが強い」とか「やはり女だ」とかいう考えを捨て切れない聴衆が多かったかも知れない。

(補足) じっさい、「In vino veritas.(酒の中に真実あり)」とか、「女の髪の毛には大象も繋がる。」(cf. “One hair of a woman draws more than a hundred yoke of oxen.(女の髪の毛一本は二百頭の牛より引く力がある)”)とかいうような、よく知られた諺がある。

真理が最強であるという結論を受け入れるのは、「頭では分かって」も、容易なことではないということであろうか。

7. さて中世のパリ大学で、酒が強いが真理が強いかという問題をめぐって、以上のような公開討論が行われた。ここから現代のわれわれは何を学ぶことができるであろうか。

討論の重要性が今も昔も変わらないことは、既に指摘したとおりである。加えて、じっさいに中世ヨーロッパで行われた討論のあり方から、大いに学ぶところがあると言うことができるのではないであろうか。一見すると答えを出すことが出来ないのではないかと思われるような難問に対しても、独自の「観点」を見出して問題を整理し、議論すべきことからの存する領域を明確にさせたいと最終的な答えに到達しているからである。こういう方法には、大いに学ぶところがあると言えよう。

酒をめぐる議論としては、ワインがいいとか日本酒がいいとかいう別種の談義をする余地も残されている。「酒」という日本語は、非常に便利である。狭い意味では清酒を指すけれども、広い意味では、ワインもビールもウイスキーも、およそアルコール飲料はすべて酒である。しかし、宴席で「お酒」と言わずに「アルコール飲料は何にしますか」と尋ねられたら、ちょっと引いてしまう。言葉の響きがかなり違う。英語には「酒」にあたる言葉はないようである。もっとも、drink と言えば、酒を飲むことを意味するようであるから、「何を飲むか」と聞けば、ことは足りる。

いろいろな酒があるというのは、実は、純粋な酒が存在しない(つまり、すべての酒は不純物のまじった偽りの酒?)ということなのだという談義は、酒の席では避けたほうが良いかも知れない。たしかに理屈では、アルコール飲料はアルコール(エタノール、 C_2H_5OH)とアルコール以外の部分から出来ているし、ワインの中のアルコールと清酒の中のアルコールは濃度が違うだけで、他の性質は全く変わらないから、ワインが好きとか清酒がいいと言うのは、アルコール以外の、いわば不純物の違いに惑わされて(?)いるだけ・・・などと、得意になっていると、「酒の飲み方をわきまえない奴だ」と言われかねない。

無粋な酒談義は別にして、今の世界は、酒に限らず、さまざまな価値観が入り乱れていて、收拾がつかないような様相を呈している。宗教上の対立を伴う争いは特に悲惨である。宗教も含めて文化の多様性を肯定することが 21 世紀の課題であるとしたら、そこから生じる問題を解決するために知恵を絞らなければならない。そのときに、かつて中世ヨーロッパで、実際に行われた討論の仕方から、学べることは多いのではないであろうか。

最後に、もう一つ。酒をめぐる次のような警句が、トマス・アクィナスの『神学大全』の中にあっただけで紹介しておく。

度を越して飲んだ酒は、殊に理性の使用を妨げる。(Vinum immoderate sumptum praecipue impedit usum rationis.)(II-II, 149 4c.)

(本稿は 2017 年 3 月 7 日に行われた TSS 文化大学における講演の概要です。)